

沖

俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

潤目鰯

能村 研三

吉 報

内 密 も す つ ば 抜 か れ し 鰯 挿 す

春 深 雪 露 西 亜 紅 茶 の 湯 気 ご も り

雪 搔 き の 躍 起 と 思 ふ 背 は ま ろ し

ど さ ど さ と 雄 心 覚 ま す 屋 根 の 雪

今瀬一博さんが俳人協会新人賞を受賞した。吉報が入ったのは一月二十五日、「沖」京葉支部の句会に引き続き新年懇親会の席上であった。一博さんからの電話があった時点で「受賞が決まったな」と直感した。電話に出ると「お陰様で俳人協会新人賞を受賞しました。」と一博さんの喜びに満ちた声があった。早速京葉支部の皆さんに受賞を報告したところ拍手がおこった。

俳人協会賞の選考会は昔から一月の第四の土曜日と決まっていて、二十数年前に私が受賞の知らせを受けたのは、NHK学園のカルチャー教室の指導中であつた。

私の場合三度目の正直で第三句集『鷹の木』が受賞の対象となつた。この時も、新年会が、急きよ受賞のお祝いの会になり、教室の皆さんが花束を用意してくれた。

一月二十六日は茨城支部への指導句会と一博さんの句集『誤差』の出版記念会が開かれた。この日が予定された時は、もしかしたらこの前の日に良いニュースが聞けるのではと思つたが、ご本人にはブレッシャーになるので、その事は黙っていた。

水掛論潤目鰯のにがみとも

便利さはここままでよし魚は氷に

柿本麗子句集『千の祈り』

鰯雲祈りをつづる句のあまた

佐久間由子句集『岬日和』

安房人の晴れを嘉して冬至晴

今瀬一博句集『誤差』

櫟や水戸つぼ継ぐに誤差はなし

今瀬一博さん俳人協会新人賞

吉報は筑波向かうの若菜野に

以前の「沖」の出版記念会は処女句集に限り、合同でやっていたが、近年は新年会の中で祝う形に変わっていた。今年は「ルネッサンス沖」の一つとして、小さな規模でもよいかから親しい仲間とその句集が論じられるような機会を作りたいと提案した。柿本さんは九州大会で、佐久間さんは千葉例会の後でそれぞれ開催し、一博さんは茨城支部の句会で行うこととした。

当日は支部員全員があらかじめ句集『誤差』の中から三句を選び、一人一人がその句についてのスピーチを行った。これに対して一博さんは一人一人にその句のエピソードをお話しされたのが良かった。

今回の俳人協会新人賞はもう一人石川県白山市の矢地由紀子さんの句集『白嶺』も受賞された。矢地さんは「萌」所属で、私が選を担当している「北國新聞」の俳壇で毎同良い成績をおさめられている方、昨年私が金沢で講演したときも親しくお話しをした。

三月四日授賞式の後で、今瀬さんと矢地さん合同のお祝いの会を予定している。

能村 研三

蒼茫集



干し柿

森岡正作

冬將軍真つ先富士を娶りけり
今し方側にゐたのに雪女
干し柿を峽の火種と思ひけり
厨房に肩の瘦せたる古曆
三日はや大きい胡坐は嬰のため
寒林の懐深く身中透く

箔落ち

安居正浩

金屏に箔落ちといふ歴史あり
綿虫のあの世この世を行き戻り
楳や譲るものみなゆづり終へ
無口なる柚子姫とゐる仕舞風呂
カフエラテにハートの浮かぶ冬の月
寒拆のひとかたまりといふ絆

巨き寒さ

遠藤真砂明

海国の朝日が溶けて初氷
大灘の巨き寒さに包まるる
海光に一人一世の初山河
天に炎をあげ寒泳の浜焚火
月青く凍てて荒磯ばかりかな
生きて生き抜く海国の大青空

潮満つ

辻美奈子

一陽来復河口より潮満つ
外套の父の齢をおもふかな
星の死を新星と呼ぶ寒茜
ウイスキーボンボン儂くこはれ雪催
初富士や登坂車線ゆるゆると
日脚伸び釘無橋の石づくり

岩座 千田百里

「暫」のこの世窺ふ羽子板市
義士の日の暈目を日の涉りゆく
年の瀬の流れてゆくよ船の灯も
一軒のための小径や茶が咲いて
岩座をくぐり今年の水となる
初鏡わたしは何をする人ぞ

寒立馬 秋葉雅治

高層や水の凍らぬ街に住み
目礼にこたふ黙礼冬深し
夜半覚めて毛布は慈母のごとくあり
歌かるた心凍らす一首あり
しんしんと雪の任地へ峠越え
吹雪く中鬣さはに寒立馬

抗へり 林昭太郎

ポインセチア跨いでよりの強気なり
冬の日を皺にあつめて象の背
鯛焼のかたちに湿り紙袋
雪催ひ海くろぐると音潜め
寒卵搔き溶く箸に抗へり
流水の哭く夜星座の近々と

油紋 荒井千佐代

髪解きて巫女が家路へ寒満月
木の洞に籠る潮鳴り針祭
あまたなる聖樹被爆の地を照らし
聖樹立つ殉教そして被爆の地
オルガニストのみに灯や聖夜弥撒
大年の雨や油紋の船溜り

眼光 宮内とし子

冬深む波のとどかぬ波ごろし
霜柱バロック建築かくやとも
鷹放つ優勢すでに眼光に
綿虫やもとより殺気などあらず
衣被手の内すぐに読まれたる
幸せの透けて花びら餅の紅

こんもりと 大川ゆかり

一羽だけ色違ふ鳩クリスマス
トルコ石のやうな目の猫冬うらら
煤逃げや眼鏡の度数合はせをり
妃の多き出雲の神や実南天
青木の実きいと張りつめてゐる空気
こんもりと黒くわりんたう山眠る

四五粒 細川洋子

鶏頭花骨の髓まで枯れきれず
日向ぼこところろ客死せる心地
裸木となつてしまへば安からむ
嬰の齒の四五粒見ゆる初笑
羽子板市薄墨色の雲を置き
纜の八の字縛り寒土用

大冬木 甲州千草

歳末や人にやさしき工事中
出してまた蔵ふLP掃納
玻璃の雫障子に映ゆる朝かな
二本とも通過の電車風花す
学童や秀をくれなゐに大冬木
綿虫の舞の華やか弱き地震

年迎ふ 望月晴美

年迎ふ神を身近に日本人
襖絵の松に御慶の日差しかな
初明り銀杏大樹の力瘤
福袋やや大袈裟なふくれやう

冬桜おのが心の色ならむ
大いなる冬航の帆よ岬日和

春の雪 菅谷たけし

賑はひの裏のさびしき酉の市
花舗の灯の歩道にあふれクリスマス
熟考を促されをり冬木の芽
角帯を身の籬として初詣
人日の神棚にある宝くじ
仮の世の仮の純白春の雪
一枚仕立て 久染康子

木枯のひゆるひゆる強気加速せり
連山の一枚仕立て雪を被て
しづり雪笹藪の笹にほひけり
白鳥飛来濁りし田水貧りぬ
着膨れていつもと違ふ声の出る
福藁を踏めば日向の匂ひけり

蕪村忌 広渡敬雄

豚運ぶ車に抜かれ年の暮
蕪村忌の十能の炭うつくしき

七種粥畔に小さき火の見ゆる
浅間嶺は真白き屏風空つ風
N極に冬の集まる砂鉄かな

郷日和 田所節子

東京に星の出揃ふ淑気かな
寒波晴れ山に銃声こだまして
はらはらと陽の舞ふ冬の紅葉山
部屋の陽を干大根の奪ひをり
水仙咲くなぞへ囲ひの郷日和
大噓いままで何を悩みぬし

遠景 松井志津子

遠景に燿歌の山や初あかり
裸木に裸木の影父母遙か
梟の好きな主治医を待みとす
荒海も馳走のひとつ鮫鰯鍋
寒むと言ひ寒と応ふる湖明り
白鳥と目が合ひ幸を信じけり

無言の色 楠原幹子

冬ともし和紙の折り目の翳りかな

沢音のかすかに蘆の枯れゆけり
一陽来復やるべきことのまだありて
酔海鼠や歳かさねても尖つて
五歳児の秘密のはなし竜の玉
雪降り積む白は無言の色かとも

対峙 藤原照子

等身の楽器を背負ひ初電車
冬うらら会はせたき人伴ひ来
刻々の富士との対峙寒夕焼
夕日透く樹海落葉の累々と
疎開児の年長たりしのつぺい汁
炉語りや熊の敷皮眼の光り

初景色 鈴木良戈

木場堀を和船行き交ふ初景色
つながれて寒き無人の屋形船
自転車を軋ませ走る医務始め
楳の大きな枝を生けにけり
食積の経し百年の絵を合はず
霜晴や町を貫く小名木川

潮鳴集

具象化

井原美鳥

爆ぜ競ふ鍋の湯玉や年つまる
着ぶくれて電車待つ間の富国論
仏心の具象化冬の花蔵
冬草の根力開校百年史
枯れきつて月光浄衣に適ひけり

白障子 板橋昭子

やはらかに紙も息する白障子
千本公孫樹鎧ふ黄金の二十丈
海光に磨かれてをり蜜柑山
燦々と梨の冬芽に陽の零る
鷹匠を継ぐ若者がゐて清し
千の枝 荒井千瑛子

千の枝 冬青空にもつれなき
「ひだまり」てふカフェあり冬日したたり



初浅間雪のはだへの艶めけり
足曲ぐる磔刑像や寒波くる
冬潮の寄するか真間の川騒ぐ

お福分け 七田文子

チエックインの肩に触れけり団子花
木造の三階にゐる雪女
男滝かな力を入れしままに凍て
ポイントの溜る心地よ日向ぼこ
日脚伸ぶお福分けてふ良き言葉

無といふ色 福島茂

先生の声が袖から聖夜劇
地球儀にふつと息かけ寒気団
数へ日の港のバーは昼間から
地吹雪の無といふ色のありにけり
太棹の撥の勢ひ夜の雪

沖作品



能村研三選

稜線のやがて光線神の旅

福岡

小田 里己

冬晴にかをりも濃かり築地松
熱爛や話は右往左往して
鋭角の空気となりぬ初霰
除夜の鐘しづかな波紋屈きをり
寒昂宇宙へ希望無限大

東京

平松うさぎ

神楽笛大蛇の首は宙を舐め
冬至すぎ碧き地球の膨らみぬ
柚子湯てふ極楽にゐて小さき鬱
数へ日や露地行灯の一つづつ
はらからのごと枝差し交はず冬木かな
燃ゆるまま沈む金星大枯野
一陽来復蝦蟇口に湧く硬貨
着ぶくれて魚の解体ショーに遇ふ
朝刊のちらし孕みや年詰まる

長野

植村 一雄

人影に灯る外灯石路の花
のど飴に花の香りやクリスマス

市川市

荒木 澤子

冬うらら案内板に現在地
湯の街に駄菓子屋のこり石路の花
古書店の奥のパソコン年迎ふ
籠を編む竹を自在にちやんちやんこ
信濃嶺の紅葉引き寄せ魅夷館
雪吊の風の奏づるピチカート
月の冴ゆ闇に待機の油槽貨車
鉾杉に寒気降り来る神の磴
みちのくの灯り淋しき雪催
芒にて終る地獄絵底冷えす
遠く来て短き旅の襦袢かな
冬暁漁舟湧き出づ島の陰

長崎

福山 和枝

高久 正

沖作品 15句選評

*
能村研 氏

稜線のやがて光線神の旅 小田 里己

表記では「稜線」「光線」と「線」が重なることで、句のリズムに弾みがつく。しかし「稜線」は山の峰から峰へ続く線、尾根を意味するもので「光線」は幾何学的な概念で時間と共に動きが生じるものであるので、同じ線でも全く異質なものである。淡い紫色を帯びた雪原に多くの稜線が輝いている姿は神々の住む世界を連想させる。山の稜線が徐々に明るみ、太陽が顔を出す瞬間は、正に神が出現するかのように神秘的である。

冬至すぎ碧き地球の膨らみぬ 平松うさぎ

冬至を過ぎると毎日少しずつ太陽の高度が上がリ、日が長くなる。そうなるたびに日に暖かくなるように思うが、正月を過

ぎた頃が一年で一番寒い大寒となる。短い昼のうちに太陽から受け取った温かみは、長い夜の間宇宙へ向けて放射されつくして、日を追って寒くなるからだと言う。この句は、こうした気象現象を踏まえながらも感覚的に捉えた句である。冬至を過ぎた地球は光を含みながらも、寒さのもとを次第に膨らませていく。

着ぶくれて魚の解体ショーに遇ふ 植村 一雄

俳味のある句である。魚の解体ショーはいろいろな所のイベントで行われることが多くなってきた。これはどこかの魚市場での光景であろうか。一般的には「マグロ」が主流で、威勢のよい法被姿で、60キロ位の本マグロを大太刀で手際よくさばいていく。しかし観客の方は、そのリアルな解体現場に興味津々でありながらも、着膨れたまま只々呆然と見るだけであった。

のど飴に花の香りやクリスマスマス 荒木 澤子

のど飴とクリスマスマスの幹旋が面白い。喉がいがいがあるとき、急にせきこんでしまったときに、のど飴を口にすることがある。昔はやや口当たりの悪いものが多かったが、最近では種類も沢山あり、ハーブの香りであったり、薔薇の香りのするものも出てきた。ケーキなどの華やかさはないが、ささやかにクリスマススを祝う気持が表れている。

(以下略)